

「分かちあい」の起原：ヒトとヒト以外の霊長類における共存の諸相
第6回研究会報告

1. 著作権保護のための表示：

当報告の内容はそれぞれの著者の著作物です

Copyrighted materials of the authors

2. 研究会基本情報

日時：2024年12月21日（土）13:30～18:30

場所：AA研306室

報告者：

1) 座馬耕一郎（長野県看護大学）

2) 馬場淳（和光大学）

参加者：16名（対面、オブザーバー参加者4名）

3. 内容（発表要旨および主な議論）

3-1 分かちあいにおける価値について（座馬耕一郎）

【要旨】

チンパンジーとヒトに共通する特徴は、それらの共通祖先も持っていた可能性がある。そこで本発表は、チンパンジーの分かちあいの事例（チンパンジーが「分かちあい」と認めているか分からないが、観察者が「分かちあい」と認める可能性のある行動の事例）から、ヒトと共通する特徴を見出すことを目的に行った。分析対象は発表者がタンザニア、マハレ山塊国立公園で撮影した野生チンパンジーの映像で、「同じ木の上で複数頭が同時にその木の花を採食する（事例1）」や「母が使っているアリ釣りの道具に子が手を伸ばして手に入れ、母は新たに道具を作る（事例4）」など、植物性の食物や昆虫の採食時に撮影した8事例を取り上げた。とくに「オトナオス（BB）が地面から拾ったマメ科のサヤ（X）を別のオトナオス（AL）が手にするまで（事例8）」の約12秒間の行動について詳細に分析した。

事例8では次のような行動の連鎖が観察された。①BBが地上で四足立ちのまま、地面に落ちていたサヤ（X）を左手でつかんで、手を放し、その奥にあった別のサヤ（Y）を左手にとって口に運んでくわえ、再び左手を伸ばしてXを持ち、そして、②座りながら左手のXを右手に持ち替え、口にくわえていたYを左手に持ち、その後、③右手に持つXを口に運んでくわえながら、④右方からゆっくり歩いて近づいてくるALに目と顔を向け、Xを右手で口から外し、そのXを持つ右手をALの方に動かし、

そしてALに向けていた目をそらす。その直後、⑤ALが右手を伸ばし、BBの右手のXを過ぎて、BBの左手のYに近づけると、⑥BBは素早くALに目と顔を向けると同時に、左手をALの手から遠ざけ、右手に持っていたXを放す。⑦ALは右手をYの方に伸ばすのをやめて地面に落ちたXを右手で拾い口に運び、BBは左手に持つYに右手を添えて両手で持ち口に運ぶ。

チンパンジーは、他個体の食物に手を伸ばしたり、他個体を覗き込むことで食物をねだることが知られている（文献3）。しかし事例8では、⑤ALが手を伸ばす前の、④ALが歩いて近づく動作中に、BBはくわえていたXを手を持ちALの方に動かしていた。「相手に向かって歩く」行動は、「受け手が『相手が自分に何らかの関心を持っている可能性』を感じる行動」と考えられ、「毛づくろい」や「つかみ合い」など、さまざまな行動につながる可能性がある。BBは近づくALに対して、その意図がはっきりとは分からなかったかもしれないが、自分が食物を手をしていることから「食物をねだりに近づいている」可能性を感じ、「とりあえず（文献2）」食物を渡そうとしたのかもしれない。このような「相手がねだるかどうかわからない時点でとりあえず物を渡そうとする行動」は、観察者によって「あげようとした」とみなされることがある。ヒトの「あげる」という行動には、「能動的に自分があげたい物をあげる」場合や、「相手の意図や欲しい物がよくわからないけれど、とりあえず渡してみる」場合などがあるが、事例8で観察されたのはこの後者の側面で、チンパンジーとヒトに共通する特徴であると考えられる。

事例8の2つのサヤについて、①BBがいったんXから手を放し、Yを先にくわえていること、⑤ALがXではなくYに手を伸ばしたことから、⑥BBがYをALから遠ざけ、Xから手を放していることから、XよりもYの方がBBやALにとって「ひきつけられる（欲しい、魅力がある）」という「当事者にとっての価値」があったと考えられる。それではなぜBBは①で口にくわえていたYをそのまま食わず、②くわえていたYを手を持ち③Xを口にしたのであろうか。チンパンジーは口にしている食物であっても「ねだる」ことを妨げない。映像では分からなかったが、おそらく②の時点で近づくALがBBの視野に入ったのであろう。BBは食物をねだられる可能性を感じ、口にしていたYをねだられたくないため、XをALに近い右手に持ち替え、Yを口から左手（ALから遠い方の手）に移したのかもしれない。しかしALの接近が必ずしも「ねだる」行動につながるとは限らないため、③BBはXを口に運んだのかもしれない。そしてさらに④ALが接近してきた時点では、食物を渡さない選択肢もあったかもしれないが、すでに「ALがねだることを想定して右手に移した魅力の弱いX」があるため、口にくわえた直後のXを右手でALに差し出したのかもしれない。

事例8では、⑥BBはXから手を放しているが、Xに対する「欲求の断念」（文献3）があり、Xを放棄したといえる。事例4では、母から子にアリ釣りの道具が渡った直後に母は新たな道具を作っていたが、取り返そうとする行動がなければ、手渡しであっても、手から離れた物は当事者にとっての価値を失っているとみなすことができるだろう。このような物の放棄はヒトにおける交換や売買でも観察される。たとえば「Aの持つリンゴをBが100円で買う」場合、結果としてAが100円を持ちBがリンゴを持つことからリンゴと100円は第三者的な価値として等価かもしれないが、当事者にとっての価値は異なっており、Aは「リンゴより100円が欲しい」と思い、Bは「100円よりリンゴが欲しい」と思い、そして交渉後にはAはリンゴを放棄し、Bは100円を放棄し、取り返そうとはしない（もし当事者にとって等価であれば、必ずしも交換に至るとは限らず、交換しない結果もあるだろう）。このように考えると、手にした物を放棄する行動は、チンパンジーとヒトに共通して観察される特徴であるといえるだろう。

事例8では、地面にあったサヤが拾われ、放棄されて、もとの状態に戻り、事例1の木の上の花と同様に、誰もが手にすることを許す物になったといえる。「分かちあい」には共有物を皆で利用するという側面があると考えられるが、事例8の地面のサヤや事例1の木の上の花は誰の物でもなく、共有物とはいえないだろう。しかし「共有」には、「所有」のような「集団の個体と物を紐づける」という閉じた側面だけでなく、「集団の誰もが手にすることができる」という開かれた側面もあるように思う。この後者の側面が「観察者がチンパンジーに『分かちあい』を観察したと認める行動」にはあり、「誰でも手にすることのできる物を皆で手にする行動」や「一度手にした物を放棄して他個体が手にする可能性を開く行動」が、ヒトとチンパンジーに共通する「分かちあい」の要素のひとつであると考えられる。

事例8は非血縁個体間での食物の移動であり、互惠的利他行動（文献4）の文脈で考察することができるかもしれない。ただ、互惠的利他行動が生じるために必要な交渉の「記憶」について考えると、与え手が物を放棄した場合、その記憶は「与えた」という記憶にならない可能性がある。また事例8のような手に入りやすい食物の場合、与え手が失う利益も受け手が得る利益もかなり小さいと考えられる。これらのことから事例8のような食物の移動を互惠的利他行動の文脈で捉えることは困難であるといえる。

今回の発表では、食物がほかにもある環境で、なぜALはわざわざBBに近づいて食物をねだったのか、分析しなかった。この点については今後の課題としたい。

[参考文献]

- (1) 岩田有史 (2022). 全体の努力と個体の努力—群れはいかに維持されるのか. 河合香吏編「関わる・認める」京都大学学術出版会、pp. 97–125.
- (2) 木村大治 (2016). ケアという文化の生成. 内堀基光、山本真鳥編「放送大学大学院教材 人類文化の現在：人類学研究」放送大学教育振興会、pp. 116–131.
- (3) 黒田末寿 (1999) 『人類進化再考—社会生成の考古学』以文社.
- (4) 室山泰之 (1999). 利他行動. 西田利貞、上原茂男編『霊長類学を学ぶ人のために』世界思想社、pp. 140–161.
- (5) Zamma K (2005). Rejecting a bit of meat to get more. Pan Africa News, 12(1), 8–10.
- (6) 座馬耕一郎 (2013). 霊長類とシラミの関係. 霊長類研究, 29(2), 87–103.

【主な議論】

●食べ物を「置く」という行為：ゴリラでも「置く」という行為により「モノ」を他者に取らせるということはある。若いオスゴリラが持っていた植物性食物（果実）を地面に置いて少し下がり、母親がそれを取ることを観察している。若オス同士のあいだでも同じようなことがあった。ほかにも大きな果実をちぎってその一部を置き、それを他の個体がとるということも観察している。これらは明らかに「(モノの) 放棄」および「(相手に) 取らせる」という意図を持った行動であると考えられる。

●「場所」か「モノ」か問題：種レベルないし集団（群れ）レベルで特定の「場所」に対する優先権としての「所有」があるか。「所有」すなわち「自分のモノ」というときの対象は「モノ（食物）」というより「場所」である可能性がある。ある場所に誰が陣取るかという問題になるが、群れ内個体のあいだの序列関係がはっきりしているニホンザルの場合には明らかに「場所」をめぐる優先権ないし占有権が認められ、特定の「場所」を占めた（優位）個体は、劣位者のその場所への侵入を許さない（威嚇して追い払う）行動が観察される。他方、チンパンジーでは「場所」の奪い合いというのはみられず（「場所」を譲るといったことも起きず）、あくまでも「モノ（果実など）」をめぐるやりとりが発生することがふつうである。だが、この交渉（モノをめぐるやりとり）が発生する以前に「場所」をめぐる駆け引きや競合があったのかもしれないが、それは観察されていない。

●「所有」：他者に取られる前に自分ないし自分たちの「モノ」という「所有」が認識されているか。その際、取られる相手が同種か異種か、同種であっても自集団か他集団かで反応（行動）が異なるのか。「モノ」の「所有」の前に「場所」の占有、あるいは優先権という問題があることが考えられ、たとえば上記のように、ニホンザルの場合は「場所」を陣取るということがあり、それがその「場所」にある「モノ」についても優先権となって、他個体の侵入や接近を拒む（威嚇したり、追い払ったりする）ということが起き、結果的にそこにある「モノ」についても優先的に自分の「モノ」として扱うことができる。だが、チンパンジーの場合、ニホンザルとは違う「場所」を占めるということの意味があるのではないか。少なくとも「場所」の奪い合いは観察されず、あくまでも「モノ」をめぐるやりとりが観察される。

たとえば、屋久島のニホンザルでは隣り合う二集団のあいだで遊動域に重複があるため、重複した場所に関してはそれをめぐって取り合いが起きる。具体的にそうした場所で群れ同士が出会うと敵対的な交渉が起きる。ただし、その場所に対する優先権は個体に属しているのではなく、集団（群れ）に属している（「われわれの場所」）ように感じられる。ニホンザルにとって「場所」が重要なのは確かだが、「所有」というのは極めて文化的な概念であるし、「互惠」や「分配」というのもわれわれ人間の基準に基づいており、それがニホンザルやチンパンジーにとっても「正しい」かどうかは判明される「決め手」となる観察事実を待ち、探している、ということを観察者は行っているのだと言える。

●社会学的なアプローチ：今日の報告は徹頭徹尾、行動の解釈（しかも極めて微細な行動のひとつひとつに対する解釈）を与えている、という点で徹底的に社会学的な分析だったと言える。発表者は「生物学」だというのが、むしろ生物学は入っておらず「社会学」だった。「あげる（与える）」と「渡す」の違いにこだわっていたことも、このことと無関係ではないだろう。あるいは「近づいてきた」「見つめた」といったやりとりにも「意図」や「予期」を認め、解釈を施すということを観察者はしていて、今日の発表もまさにそうしたことを基にしている。解釈が憶測である可能性を否定するのは容易ではないだろうし、だからこそ、行動を微細に分析するということをやらざるを得ないという事情がある。社会生物学はそれらをすべて遺伝子（あるいは脳）に還元してしまう、という意味で単純に過ぎる（し、面白くない）。生物学という仮説検証型の研究では、社会生物学がそうであるように適応度という究極要因で説明するし、今日の話もその傾向があるかもしれないが、至近要因で語る可能性を切り捨てる必要はないのではないか。互惠的利他行動仮説もわかりで、魅力的な仮説かもしれないが、これもけっきょく予測に過ぎず、実証はできていない、特にチンパンジーではまったく実証できていない。間接互惠性（たとえばアロマザリング行動など）の可能性も検討してみてもいいかもしれない。

その一方で、この分析を「社会学」であるというのなら、足りない部分もある。たとえば、今日の発表では二個体の交渉だけを分析対象としているが、群れの他の個体の存在や文脈ということも説明する必要がある。あるいは、この二個体の交渉が起きたとき、二者は既に十分に食物を食べており、お腹がいっぱいだった、落ちついた穏やかな状況下に起きたことかもしれない。どのような社会的状況下で起きた分配/交換だったのかといった背景/文脈の情報や説明も欲しい。だが、「お腹いっぱい」をどう判断できるのか。「お腹いっぱい」は主観的な感覚でもあり、その意味でどれだけ食べたら「お腹いっぱい」なのかは判断できないから、いつからいつまで何を食べていたかといったことにより検証するしかないだろう。二個体の社会的関係についてもどこまで時間的に溯ればよいのかという問題があり、社会関係の歴史や文脈の分析および説明には、これで十分という線がない。

●ヒトとの共通点と差異：発表者はヒトとチンパンジー（やニホンザル）との違い（差異）に関しては、進化史上の分岐後のどの時点で獲得された形質かを知ることが難しいので、むしろヒトとの連続性に着目し、共通点を探しているという立場をとっている。何を共通点として見出すか、指摘するかが重要な点である。今日の発表も、そうした意味で「ヒトではこのように考えられるから（それを根拠に）、チンパンジーでもそうではないだろうか」という話をした。

●認識論：「価値」といったときに主体的な価値と客観的な価値を区別して考える必要がある。たとえば「分かちあい」といったときにも、彼らが意識していないかもしれないけれど、結果的にそれが「分かちあい」になっていることもあるのではないか。たとえばゴリラとチンパンジーが共存している地域においては、両者の食物は重複しているものもあれば、していないものもある。けれども、同じ地域に共存しているということ自体が既にその地域（森林の資源）を「分かちあって」いるといえるのではないか。こうしたことは彼らが価値のあるものと認識しているかどうかということとは別である。このことは、本研究会が「分かちあい」を認識論的にとらえるかどうかという問題にも関わる。現在の生物多様性という考え方は認識論的ではない。生態系に生きる生きものたちは、意識されていないけれど、そこに共存しているということ自体がその生態系の恩恵を「分かちあって」いることになっているという考え方であり、それは認識論的な考え方ではない。本研究会でも認識論的な価値を「分かちあう」ということに限定しない方がよいのではないか。

●記憶と負担：負担（ヒトの場合は負債？）は、もらった方は記憶しているけれど、与えた方は案外記憶されていないのではないか。今日の話でも、食物として大して魅力的ではない、つまり価値のない「モノ」が与えられているのでその可能性はけっこう高いかもしれない。与える側にとって「負担（負債）」ではない、「負担（負債）」として記憶されない

からこそ、分配が起きるのではないか。だが、チンパンジー（やニホンザル）には言語がないため、それを確認することは原理的にできない。とはいえ、では、ヒトであればこうしたことが確認できるかといえば、必ずしもそうとは言えない。ヒトは言語によって「確認」することができそうに思われるが、負担や負債の感情をふくめ、記憶や記録が具体的な行動に対し意味をもつか否かは、前回の生駒さんの発表にあったように、かなりよるべのないことのようにも感じられる。そうすると、関係や文脈を作り出すところの行動をみるしかないのかもしれない。

今日の発表でとりあげられた事例は「与える」という行動としてあまりにもさりげなき過ぎる行動で、それを記憶するということが果たして起こるのだろうか、疑わしい。だが、社会的な視点にいまいちど立ち返るならば、当事者たちが「与えた/与えられた」を記憶しているかどうかはともかく、周りの個体たちが「あの二人はいっしょに食べられるんだ」「分かちあえるんだ」という当該の二者の関係性については認識し記憶されるのではないか。「モノ」のやりとりをしている二頭の関係性を周りの個体たちが記憶する可能性があるという話は、第2回研究会の北村さんの発表に通じる。トゥルカナにおけるベグングを介したモノの移動をめぐるやりとりのプロセスは、われわれの名はナンセンスで何をやっているのかわかりづらいが、そこには関係性の構築が価値をもつのであり、ベグングしてモノが動くという相互行為の目的というものが関係性の構築にあるのだとしたら、要求されたすべてを与えないとか、ときには与えないということもあっていいのかもしれない。価値があるのは「やりとり（関係性）」であり、関係性の構築にこそ価値があり、「モノ」そのものに価値があるわけではないのかもしれない。ただ、今日の発表でもまさにそのことを問題とし「関係性の構築に価値がある」ことは自明である、といたいところだったのだが、チンパンジーにとって本当にそうかという問題もあって、そのように結論づけることは難しかったというのが正確なところかもしれない。

3-2 分かちあいの時間：ケニア・メル社会における頼母子講（ギクンディ）と互酬性（馬場淳）

【要旨】

本発表では、ケニア・メル社会を事例に、頼母子講（ギクンディ）が人々（とりわけ女性）の共存や共生を可能にしているありようを民族誌的に考察する。また理論的には、それを事例に、分かちあいのなかから互酬性がかたちをなしていく契機をとらえたい。というのも、進化史的に「贈与の基底には、資源の「分かち合い」、とりわけ、食べ物の「分

「分かち合い」をめぐる力学がある」とすれば、「分かち合い」をめぐる力学を原初的な起動力にしながら、贈与をはじめ、再分配や等価交換などのさまざまな交換のかたちが成立してゆく過程を追跡」していくことが課題となるからだ（大村敬一「集団のオントロジー——「分かち合い」と生業のメカニズム」河合香史（編）『集団』京都大学学術出版会、2012年、120-121頁）。もちろん、人類学者が調査・考察する個別社会の事例は進化といえるほど長期的な時間軸を対象としてはいないが、この課題を考える一端にはなるだろう。

メル語のギクンディとは「自助グループ」(self-help group)を意味し、大別してプロジェクト型と ROSCA 型 (Rotating Savings and Credit Association の略称)がある。本報告で焦点を当てるのは ROSCA 型だが、厳密に言えば、ギクンディが意味する領域はそれよりも広いことを指摘しておきたい。調査対象としたティガニア地方の村（人口約 5000）には多くのギクンディがあり（発表では 27 ギクンディを示した）、女性たちはたいてい 3〜5 のギクンディに入っている。毎週行われるので、女性たちはギクンディの曜日・時間がかぶらないようにしている。なお、ROSCA 型ギクンディへの加入は、結婚や子どもの誕生が契機となっており、実際の講員は既婚女性やシングルマザーである。

ギクンディは、議長(chairlady)を筆頭に副議長、書記、会計を置き、「助け合い」「メリーゴーラウンド」「貯蓄」「ローン」といった実践的なカテゴリーをもつ。外部の貯蓄信用組合 (SACCO) や (ギクンディの崩壊を保障する) 保険会社と連携しているギクンディも多い。銀行口座をもたない多くの村落女性にとって、ギクンディは身近な「銀行」といっていいが、「助け合い」と「メリーゴーラウンド」の存在はギクンディを銀行以上の何かになっている。「助け合い」は、講員のニーズに応じて、数百シリング程度の少額寄付から冠婚葬祭に関わる儀礼（食事の準備も含む）の手伝い、そして日常的ケア（病院に付き添うなど）まで幅広い。とくに各種儀礼が質量ともに大規模化し、近隣の少数親族の手伝いでは対応できなくなっているため、ギクンディの役割は大きい。「メリーゴーラウンド」とは、すべての講員が定額（100〜200 シリング）を出し、その総額を一人が受け取る（二人の場合は折半）。貯蓄や貸付／ローンは任意だが、「メリーゴーラウンド」は毎週の義務である。年に数回は自分の番がまわってくるので、「メリーゴーラウンド」のお金でローンを返済するというも行われている。

ギクンディの意義については、苦境を生き抜く草の根の術や——開発研究（とくにジェンダーと開発）が注目してきたように——マイクロファイナンスを通じた女性たちのエンパワーメントなど、これまでの頼母子講の議論と重なり合うところはある。しかし本研究会の趣旨からすれば、婚後、バラバラになった女性たちの共存・共生を、お金とそれを通

じたモノ、労働を含む行為、情報を分かちあうことで可能にしている点を強調しておきたい。実際、婚後居住規則が父方／夫方居住で、男性のような年齢集団がもはや「ない」父系社会を生きる――婚後は実家から切り離され、極端に言えばバラバラとなる――村の女性たちにとって、ギクンディは頼れる身近な集団としてみなされている（ほかに頼れる集団として、キリスト教会の各種グループがある）。また支援（助け合いやローン）を求めるときにはその使途・理由を公表する必要があるため、各講員の家庭事情がメンバー間で共有されている。お金を軸にして集まっているものの、ギクンディの意義は経済的な側面に還元できないものがある。

ところで、ギクンディの起源が自然発生的なものではなく、国家政策と結びついていたという点には注意を促しておきたい。今のかたちのギクンディが「誕生」したのは1982年頃とされる。当時はダニエル・アラップ・モイ大統領がNyayo（具体的には、初代大統領ジョモ・ケニヤッタの足跡）の継承を掲げていたため、ギクンディはケニヤッタのHarambee（協働・協力）ポリシーと無縁ではない。実際、政府役人が村にやってきて、ギクンディの運営方法を指導したり、ワークショップなどを行ったりした。そこで生まれた2つのギクンディは、今も残っている。当時を知る女性によれば、すでにキリスト教会のグループ経験があったため、ギクンディの立ち上げは比較的スムーズだったという。また、馴染みのない「メリーゴーラウンド」は、年齢集団にもとづく円環的な時間観念・イメージが理解の助けとなったと考えられる。

最後に、分かちあいのなかから互酬性が立ち現れる契機をとらえてみたい。ギクンディは、全体的にみれば、分かちあい（クガアナ：kugaana）として考えられているが、個々の営みはマケザ（maketha）やグテジア（gutethia）などに分解できる。どちらも英語に訳せばhelpやassistだが、見返りを求めないマケザに対して、グテジアは互酬的な意味合いをもつ点で異なる。例えば、「助け合い」の寄付行為は前者であり、「メリーゴーラウンド」の供出・分配は後者となる。人々は毎週「メリーゴーラウンド」に供出したお金が積みもり積もってある時点で返ってくるという自己完結的な営みとしては考えていない。「メリーゴーラウンド」の総額をもらう番にあたったとき、まとまったお金はギクンディからのグテジアとして理解されるのである。つまり「メリーゴーラウンド」は、週ごとに（順々に）誰か特定の個人と集団（ギクンディ）の互酬的交換を実現していくのである。これは、人々をギクンディにつなぎとめる動機づけの一つにもなっている。

【主な議論】

●国家政策として国がこの枠を作ったという話だが、信頼関係をどのように構築したの

か、もしフリーライダーのような者が出てきた場合に罰則等が作られたのか、また、「ボス」や「指導者」のような存在が出てこなかったのか？

→国が最初に持ちこんだときには、役人が来てワークショップをはじめスキルを教えるなど含めていろいろなことをしたらしい。もともとは二つだったギクンディがいまも残っていて老舗のようにになっている。この二つのギクンディに関わっていた人たちが現在「ボス」ないし「リーダー」のようにになっている。そのような「ボス」的な人が2-3人いて、彼女たちは新しいギクンディを作る際に主導したりもしており、ギクンディの増殖に寄与していると言ってよい。彼女たちにとってのメリットというのはあまりないが（金銭的なメリットはない）、みんなに知られているので「尊敬を集める」ということはある。他方、制裁はある。たとえば過去に「持ち逃げ」をしたりした場合には、二度とギクンディには入れない。

●メリーゴーラウンド自体が「面白い」「楽しい」のではないか。

→人の事情をいろいろ聞けるという点では面白いかもしれないし、行き帰りにおしゃべりしたり雑談したりできるという点では情報交換や情報共有の場になっていて、女性たちは楽しみにしているかもしれない。出席確認をかねてメリーゴーラウンドのイベントが始まるのだが、欠席者は理由を示した上で別の人に託すことができる。ただし、もらえる人は順番で決まっているので、その時に欠席することはない。一年間で2、3回はウィナーが回ってくる。

●メリーゴーラウンドの位置づけ、貯蓄などとの違いは？

→メリーゴーラウンドで得られるお金は「メリーゴーラウンドにこれまでこれだけ出してきたからそれが戻ってくる」というようには位置づけない（それはよくない）。そうではなく、「メリーゴーラウンドが降ってきた」というように捉えるのが正しい位置づけと考えられている。その点では「積み立て志向」というものはギクンディには認められず、貯蓄とは似ているが別であると認識されている。なお、ギクンディにまったく入っていない女性（成人女性）というのはいない。ギクンディよりも銀行のほうがよいと考えている人（教育歴があり、経済的にも豊かで、社会的な地位もあるような人）でも、ギクンディには入っているのが実態である。したがって、ギクンディは単に経済的なだけの組織ではない。ギクンディはその意味でもかなり広い概念であり、タイトルに付したように「頼母子講」と訳してしまうのは一義的になってしまうので正確ではない。

●信頼やセーフティネットとしての意味合いについて、宗教との関係はないのか

→この地域はムスリムはほとんどいなくて、主にカトリックのクリスチャンであり、あま

り宗教との関係はないと思われる。ケニアには老齢年金などはないし国にはあまり頼れないので、草の根でのセーフティネットに頼ることになるという側面はある。このギクンディを保障する保険会社というのものもある。各ギクンディは何か問題があったときのために保険金を払って保険をかけている。その意味でも、安心して頼れる場としての安定感がギクンディにはある。

●ギクンディが単位となって他の協力することがあるか

→畑仕事の協力などをギクンディのメンバーがになうことはある。年齢集団のある男性とは異なり、女性は割礼がすでに1950年代にはなくなって年齢集団が作られなくなったこともあり、なかまとして結束するグループというのが他になく、ギクンディがそれをなっているということができる。

●ギクンディの地域的広がりはあるのか。たとえばナイロビ支部とかモンバサ支部とかといったものはないのか

→ギクンディは極めてローカルな組織で、ナイロビやモンバサに支部をもつようなことはない。そもそも町（たとえばメルの町）に支部を作ろうという発想はないと考えられる。

●ギクンディはそれ自体が楽しそうに見える。「分かちあい」にはそうした楽しみの要素があるのではないか

→それはあるだろう。ギクンディが大好きな人はいる。今は「ボス」になっているような人は特にそうである。

●ギクンディはケニアの国家政策として打ち出された組織、システムだけれど、どの程度浸透しているのか

→全国的に浸透しているわけではなく、ここはかなりうまくいっている例だと思われる。たとえばケニア北部の牧畜社会にはあまり浸透していない。おそらく現金経済の浸透度や、近くに町があってマーケットで換金作物（野菜やミラーなどの嗜好品）で「小金」を稼ぐことができるので、ギクンディに少しずつお金を出すことはそれほど難しくなくできるといふ条件も影響しているだろう。

●膨大なお金が必要なお金が必要なとき、それはギクンディから「借りる」のか「寄付（のようなもの）」として受け取れるのか

→大学に進学するとか病気が重くて医療費が大きいような場合は、ギクンディというよりは地域全体に「呼びかけ（ハランベ）」をしてお金集めをすることが一般的である。た

だ、それだけでも足りないこともあるので、それプラス、ギクンディのローンを組み合わせて工面することになる。ギクンディにおける「助け合い」のお金というのはあくまでも少額であり、これは寄付として扱われるが、大きなお金はやはりギクンディでローンを組み、ギクンディの規模（構成員の人数）にもよるが、これに加えて「呼びかけ（ハランベ－）」を組み合わせないと無理である。

●（大きな）ローンを組んだりした場合などにも負債感が発生しないのか

→負債感はあるとしたらギクンディ全体に対するものであり、誰に対してというものではない。その意味でメンバーはみな対等である。メリーゴーラウンドについても大きなお金をもらった（「グテジア＝助け（あい）」）ということに対して負債感を抱くことはないと思われる。円環の中に投げ込んだお金はすでにその人のお金ではなくなっているのかもしれない。だからこそ「グテジア＝助け（あい）」として意識されるのだろう。また、ギクンディのイベントで利益が出た場合にもすべてメンバー間で「山分け」する。それほど複雑なことはやらず、基本的にわかりやすく単純である。

●ギクンディはお金という経済的なセーフティネットであるだけでなく、ギクンディで培われた社会的な関係、ネットワークの構築がだいじなのではないか

→おそらく経済的な要素よりも、社会的な関係の構築のほうがより重要だと思われる。そのように考えると、先の座馬さんの発表にあったような「食べ物」には価値がない、価値があるのはむしろ食べ物の移譲を通して構築される（あるいは強化される）関係性であるという話に通じる。「分かちあっている」という関係性のほうがより重要なのだと思える点で似たところ＝共通点がある。また円環という形態は「負債」という効力をもたない。誰が誰に負債を負っているということが意識されないという意味で、円環は負債のネットワークではない。